慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	高齢化社会と人間生成：現代中年のライフストーリー調査にみるエイジング
Sub Title	
Author	小倉, 康嗣(Ogura, Yasutsugu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.228- 237
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0228

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

おいて考察しており，政策への示唆につなげ，また今後の研究の豊かな拡がりを確約する構成となっている。

総じて，家族社会学領域，あるいは「家族と仕事」研究やストレス研究の領域における実証研究として，高く評価する。

他方で問題点，課題もいくつか指摘できる。(1) 育児期後を末子7歳から19歳以下としたことの適切性。データの制約もあるがすこし広すぎるかもしれない。(2) 分析データは全国家族調査 (NFRJ98) であるが，7章の一部に小規模調査データが用いられている。全国家族調査で一貫するという立場もあったのではないか（公開データの欠点を小規模データで適格に補っているということもできる）。(3) 分析項目の適切性。役割過重にしぼったこと，負担感を1項目にしたこと，などの説得力が十分か。(4) 本研究を育児期の分析と比較したり，国際比較につなげるなどの今後の課題も指摘しうる。

これらの問題点・課題の指摘は，本論文が閉鎖的な研究ではなく，この分野を刺激し貢献する豊かな可能性を持つものであることの証左でもある。また，これらの多くは，公開データを使用する研究につきまとう不可避的な問題でもあり，そうした問題への対処の好例として後続の研究に資するものである。

結論

以上，本論文の内容の審査を通じて，われわれ審査員は，西村純子君に博士（社会学）の学位を授与することが適当であると判断する。

博　士（社会学）［平成17年2月26日］

乙　第3901号　小倉　康嗣

高齢化社会と人間生成―現代中年のライフストーリー調査にみるエイジング―

〔論文審査担当者〕

主　査　　慶應義塾大学名誉教授
　　社会学博士　　川合　隆男

副　査　　慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員
　　博士（社会学）　　有末　　賢

副　査　　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
　　教育学修士　　渡辺　秀樹

〔学識確認担当者〕

慶應義塾法学部教授・大学院社会学研究科委員
　　博士（社会学）　　有末　　賢

内容の要旨

本論文は，高齢化社会を人間形成の在り様が根本的に問い直される「変革期」として捉え直し，そんな歴史的社会的状況のなかで人間存在と社会とのかかわりあいをどう考え，そしてその存在論的基盤を

どこに求めていけばよいのか，という〈人間形成観へ問い〉を，現代中年のライフストーリーのききとり調査によって追究し，理論的・方法論的に考察した論考である。

その試みは，以下のような構成によって展開された。

まず「第１章　理論動機と認識目的–メタ理論的構図」で，本研究の理論動機と認識目的を，高齢化社会をめぐる現実的背景から引き出し，根拠づけ，さらにメタ理論的レベルから明確化した。

第１節では，高齢化社会を「再帰的近代」という歴史的社会的文脈の一様相として認識し直し，人間存在の様式や人間関係のあり方が根底から問い直されるラディカルな変革期として位置づけた。そしてそういった歴史的社会的状況を背景に主題化されてきた「エイジングの発見」という事態の内実を明らかにした。これらは本研究のメタ理論（意味解釈法を方法理性とする「生成的理論」）と理論（視角としての〈ラディカル・エイジング〉，認識装置としての〈再帰的社会化〉etc.）を根拠づける現実的背景として提示された。

第２節では，第１節で明らかになった現実的背景に根拠づけられた方法論 (methodology) として，「生成的理論」の構築という本研究のメタ理論的構図を素描した。「実証から実践（生成）へ」というメタ理論的課題と，「了解可能性」と「議論の論理」にもとづいた方法論的手続きを説明し，本研究の筋道を明らかにした。

「第２章　視角と方法–調査問題の構成」では，第１章での議論を受け，また先行研究を批判的に検討しつつ，どんな理論的構えでどのように現実への参入を図るのか，本研究の視角と方法を構成した。

第１節では，わが国におけるこれまでの高齢化（高齢者）に関する社会学的研究の理論的展開を批判的に検討し，これらの先行研究のなかにある，近代産業社会を背景とする機能合理的な人間形成観と，その人間形成観にもとづいた論理実証主義的社会認識というバイアスを問題化した。同時にそれらを踏まえて，「エイジング」概念を理論的インプリケーションをもった生成的概念として位置づけ直し，〈人間形成観への問い〉を主題化する〈ラディカル・エイジング〉という本研究の視角を構成した。

第２節では，〈ラディカル・エイジング〉の視角から〈人間形成観への問い〉を探究していくうえで，いかなる概念的構えで臨んでいけばよいのか，その認識装置 (framework) と方法 (method) を，生成的感受概念としての〈再帰的社会化〉と方法としての〈個人誌的アプローチ〉として構成した。

第３節では，これらの認識装置を用いて具体理論的な調査問題が構成された。

「第３章　フィールドの理論的選定と調査概要」では，第２章で開発された視角と方法にもとづき調査問題（人間形成観への問い）を探索していくうえで，どういった場（フィールド）に参入していけばよいのか，〈ラディカル・エイジング〉の視角から意味を担った対象（フィールド）をとりだす作業を行なった。

第１節では，現代日本における「中年の転機」が，第２節では「平成の隠居ブーム」に象徴される〈意味感覚としての隠居〉が，調査問題に対して意味を担った対象たりうることを論証し，転機に立つ「現代中年」と〈意味感覚としての隠居〉とが交差するトピック・エリアが，理論的に選定されたフィールドとして提示された。

第３節では，調査概要とともに，第４から第６章にわたって提示される現代中年のライフストーリーの「記述の文体」を，本論文の方法論的意図にもとづきながら自覚化する作業を行った。

「第４章　あきらめのラディカリズム—A さんのエイジング」，「第５章　底流としての日常を生きる—B さんのエイジング」，「第６章　いのちを信頼する—C さんのエイジング」では，３人の現代中年の

エイジングのプロセスが，調査者である私と調査協力者である彼/彼女との出会いと再会のプロセスのなかで生成されていくライフストーリーとして提示された。ここではライフストーリー生成のプロセスや状況を含めた一連の調査過程が，調査協力者の語りだけではなく，調査研究者である私自身の働きかけのプロセスとともに記述された。この三つの章で記述される調査過程そのものが，本研究の理論を構成していると言ってよい。

「第7章　生成された地平—ひとつの解釈として」では，第4章から第6章にわたって記述してきた3人の現代中年のライフストーリーから生成された地平として，調査研究者である私自身が見出したひとつの解釈を提示した。〈人間形成観への問い〉に対し，3人の現代中年によって展開されたライフストーリーから，3つの生の地平（文脈）—「離陸する生:〈超社会化〉」，「浮遊する生:〈非社会化〉」，「着地をめがける生:〈再社会化〉」—を見出し，それらが重層的に生成されるものであり，相互に再帰的な関係にあるものとして提示された。そして，これら三つの文脈のダイナミズムのなかで照射される〈意味の根源的基層〉，そしてそこから再帰的に立ち上げられる〈超越的地平〉が，〈人間形成観の問い〉に対して「生成された地平」として提示された。

結論部である最終章「第8章　生成としての人間形成」では，まず第1節において，一連の調査過程のなかから見出された解釈を理論的に位置づけつつ，調査問題（人間形成観への問い）に対してどのような結論が引き出せるかを論じた。そこでは，〈述語的再帰性〉という再帰性の経験的局面があるということ，そして人間存在と社会とのかかわりあいを，機能合理的な社会と個人という平面ではなく，〈ラディカルな自然〉に開かれた球体のなかで考えていくということ，また人間形成の存在論的基盤を，「理念」や「役割」の確かさから，〈ラディカルな自然〉に開かれた〈経験〉の確かさへと置き換えていくこと，そしてそれらが〈生成的社会〉における〈人間生成〉の地平を見出すことになるということ，等の知見が導き出された。そして，これらの知見を踏まえ，「社会化」概念を〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉として再定義した。

また2節では，知見の生成過程の舞台裏として，一連の調査に臨んだ調査研究者である私自身の動機と，調査協力者である3人の現代中年のそれぞれの動機の相互作用を再帰的に開示し，それ自体を「生成的理論」を構成する経験的データとして位置づけた。そこでは，私と調査協力者のあいだに〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉があり，一連の調査過程それ自体が〈人間生成〉のプロセスそのものであったことが明らかになった。

さらに3節では，これら理論的知見と調査経験との交差点において導き出される知見として，調査研究者の〈経験〉，調査協力者の〈経験〉，さらには読者（オーディエンス）の〈経験〉を〈人間生成〉の述語面とし，そこからの〈述語的再帰性〉によって新たな〈経験〉が生成されてくるプロセスを，〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉として理論化の過程に組み入れていく知のあり方が提言された。同時に，本論文の知見それ自体も，〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉の循環のなかで生成継承されるものとして位置づけられることが確認された。

論文審査の要旨

本論文は，小倉康嗣君が博士学位請求論文として『高齢化社会と人間生成—現代中年のライフストーリー調査にみるエイジング—』と題して提出したものである。現代日本社会の歴史的な変動の高齢化状況という局面にあって，そこでのエイジングをめぐる中年の「再帰的社会化」の問題に焦点をあてて，

対話形式による非指示的なインタビュー調査（初回調査と3年後の再調査）を試みて社会化プロセスを再考察する論文の展開である。小倉君は修士論文として『変容する日本のシルバーライフと高齢期社会—有料老人ホームを終の棲処とする高齢者—』を提出し，その後本論文に関係する論稿を『社会学研究科紀要』『年報社会学論集』『社会学評論』『質的心理学研究』等に投稿掲載して，それらの諸論文を基礎にしつつ新たに本論文を構成して提出したものである。

I. 本論文の内容構成。本論文の内容構成（目次）は以下のとおりである。（各章内の節立ては省略）

第1章　理論動機と認識目的　—メタ理論的構図—
第2章　視角と方法　—調査問題の構成—
第3章　フィールドの理論的選定と調査概要
第4章　あきらめのラディカリズム　—Aさんのエイジング—
第5章　底流としての日常を生きる　—Bさんのエイジング—
第6章　いのちを信頼する　—Cさんのエイジング—
第7章　生成された地平　—ひとつの解釈として—
第8章　生成としての人間形成
補論1　社会学を生きる　—私に刺さった「棘」と社会学—
補論2　ゲイの老後は悲惨か？　—再帰的近代化としての高齢化社会とエイジング—
巻末資料1，巻末資料2
参考文献

II. 論文の概要

第1章「理論動機と認識目的　—メタ理論的構図—」では，まず危機的文脈で高齢化社会論，高齢社会論が盛んに論議されているが，高齢者という特定の人たちの限られた問題としての問題設定や対処療法的な解決策では不充分で，現代人全世代の生き方の問題としてその根本原理までさかのぼって考え，将来への展望を切り拓いていくことが必要であろうという問題構成から書き出している。理論的な構想としては，K・ガーゲンの「日常的行為や社会的制度が依拠する自明の諸前提を相対化し，新たなる日常的行為や社会的制度を生成する」という観点から，論理実証主義等のメタ理論を離れて「生成的理論」の構築を意図するものであり，経験的研究（フィールドワーク）における「検証 (verification)」的意義よりも「生成 (generation)」的意義を重視する。したがって，臨床的世界から新たな了解としての経験知の構築を目指しての探索的 (heuristic) なアプローチを採用しようとする。

より具体的には高齢化社会をどのように認識するかをめぐって，「エイジングの発見」という基本的な視点から人口の年齢構成上の変化に止まらない，生まれてから死に至るまでの生涯全体の過ごし方（人生の枠組）が根本的に問い直されるのであり，ひとりの人間にとっても社会全体にとっても生き方や社会的意味が大きく問いかけられているとする。そのような観点から本論文では「高齢社会」ではなく，一貫して「高齢化社会」という用語が用いられている。そして人間形成の在り様（生き方）が根本的に問い直され変容していく状況，歴史的ダイナミズムのなかで，自分の生き方や社会（歴史）動態が，自分（近代）が投げかけたものが再び自分（近代）に帰ってきてそれらの意味や特性を考え，変えていこうとする反照作用・反省作用としての「再帰性 (reflexivity)」という概念が重視されることになる。ここ

から「自己再帰性」や「制度的再帰性」の概念，さらに論者の社会化をめぐっての独創的な社会化概念である「再帰的社会化」が展開されていくことになる。

第2章「視角と方法　―調査問題の構成―」は，どんな視角でどのように現実への参入を図るのかが更に論じられていく。人間形成観の問題をめぐって多くの先行研究では生産性・生殖性や機能的合理性を軸とする近代産業社会への適応主義的観点や段階的な成長・成熟観から高齢期・「壮年」期や高齢者(the aged)を対象とする研究が中心であったが，個々人の全生涯・加齢プロセス全体(aging)と社会全体に関わるラディカル・エイジングという視角から，特に「個の視点」を基礎とするミクロな作業と再帰的近代としての高齢化社会というマクロな作業とが必要であると説かれている。

そこで人間の生き方をめぐってさまざまな問いが発せられ社会全体においても「制度的再帰性」の増大を感受する現代においては，人々の役割体系が立脚する意味地平（＝人間形成観）そのものに再帰的に立ち返る方法を基軸に特に「個人誌的アプローチ」を採用して，それは，1)「相互作用の結節点としての人間」の経験的世界に定位することが可能であり，2) 新たなリアリテイ構築のプロセスに焦点を当てることができ，3) 個人誌の叙述（ライフストーリー）に着目することで人間形成を「個人の生涯という時間的パースペクティブ」から読み解いていくことが可能になるとする。そして，既成の社会化概念としての「予期的社会化」「再社会化」「回顧的社会化」概念等だけでは十分ではなく，限定的な操作概念としてよりも「生成的感受概念」としての「再帰的社会化」という概念を提起する。

第3章「フィールドの理論的選定と調査概要」では，第1章の問題構成や理論的動機，第2章の理論的な視角や調査方法論を受けて，現代日本における「中年の転機」に問題対象・調査研究対象を設定していく。不惑の時期としての「中年」から第2のモラトリアムの時期としての「中年」へ。そこは中年の「危機」から好機としての「転機」への分岐点にあり，ラディカル・エイジングの理論的インプリケーションの集約事象であり生成的感受概念としての再帰的社会化のフィールドたりうるとする。「中年の転機」は加齢プロセスをめぐる歴史的再帰性と個人時間における自己再帰性との交差である。

論者は理論的フィールドの具体的な選定にあたって太田空真・隠居研究会の著書『「ご隠居」という生き方』(飛鳥新社，1999）との出会いから，量的調査などの統計的なサンプリング方式とは異なる，言わば「雪だるま」方式で，太田氏の紹介やその著書の読者カードを活用して調査協力者の人たちに接近していく。複数の調査協力者を得たが，最終的に本論文に収録されているのはAさん，Bさん，Cさんという3人の調査協力者の各々合計十数時間，数十時間におよぶ長時間のインタビュー調査資料である。初回調査（「出会い」）は2000年1月から7月にかけて，再調査（「再会」）は2003年7月から10月にかけて実施され，大きな調査質問項目として「生の意味」や「生きる拠りどころ」，「生きがい」，「老いと死」などを設定しつつも，対話形式に重きをおいた自由な非指示的インタビュー調査に基づくものであった。

第4章「あきらめのラディカリズム　―Aさんのエイジング―」，第5章「底流としての日常を生きる―Bさんのエイジング―」，第6章「いのちを信頼する　―Cさんのエイジング―」の3つの章は，Aさん（初回調査当時53歳，男性），Bさん（初回調査当時49歳，女性），Cさん（初回調査当時55歳，男性）の3人についてのそれぞれの初回調査（「出会い」）と再調査（「再会」）のインタビュー調査の詳細な，膨大な記録と分析が試みられている。本論文は全体で388頁の大部なものになっているが，約3分の2近くが丹念なテープ起こしによる対話記録とその分析にこれらの三つの章が当てられている。

第4章での調査協力者Aさんは，前出の『「ご隠居」という生き方』の書物の読書カードに「生きてい

ける，そう思えたなら，何歳であっても隠居のつもりでいます」と書き記していた。初回調査当時Aさんは，53歳で関西出身の1946年生まれ。首都圏にある私立大学の工学部を卒業後メーカーに就職，30年ほど勤めたのち，会社の早期退職制度により52歳で退職。調査時現在無職で，再就職のつもりもない。2人の子どもも独立して，関東圏の自宅に妻と2人で暮らしている。しかし，インタビュー調査の依頼にたいして当初は「お話しできるようなことはありません」として断わっていたが，調査者に応じて自らのライフストーリーを語り出していく。「『老人力』とかの言葉よりは，『隠居』という言葉のほうが好きなんですよ」，「自分がそこから上昇志向をやめてさがる」「それで，人生をやめてしまうわけではないという感じがあります」，「いまの仕事でも，会社でも，学校でも，またはもっと極端に言うと自分の人生でも，何か方法は私はあると思うんです」，「目的を求めて生きるということ自体が，いままでの考え方を引きずっているわけです。べつに目的を求めないんだから，その日その日が楽しければいいんじゃないかと」，「生涯現役というのは，それは行政側にとっては都合のいいことだと，それは，個人の幸せとか，または人間らしい生き方というのとは，私は別だと思うんですよ」と語り，Aさんは人間の生き方を支えてきた歴史や宗教，「じねんとしての自然」に以前よりも大きな関心をよせるという。

3年振りの再調査は2003年の7月，8月，9月の3回にわたって，Aさんの生き方なり，労働観・人生観・老い観なりがどのように生成されていったのか，その経験のプロセスを掘り下げる試みとして行われた。Aさんは当初「入ったときは，居心地のいい会社だったんですよ。それがいつのころからか，あの優良会社になったんですけど，まあ居心地悪くなっちゃったんですよ」，「もう子どものときからあんまり働きたくなかったという，私ね，あの，持病があるんですよ。具体的に言うと喘息だったんですよ」「2歳のときに死にそこなった」，「私と同い年のやつで，東京に出てきてから知りあった仲間（映画の同人誌仲間）で（家族ぐるみで付き合ってきた），あの，癌で亡くなったのがいるんですよ」，「まぁ成績も悪くっても，なんか人より劣ってても，できが悪くてもまぁ生きててこそのものだねだっていうのも，まぁいちばんもとなのかもわかんないですね，私の場合」。「最近それも，まぁ，歩くの興味出てきてねぇ」，「初回インタビューのあと，Aさんは旅行の添乗員の仕事を始めていた。仕事といってもお金になるわけでもなく，日にちや行き先，そしてツアー自体も選ぶことができ，Aさん自身は仕事というよりもボランタリーな気持ちでやっていると言う」。本論の論者は，その「諦め」は人間の生の根源的な流れ＝ラディカルな意味層を明視せんとする「明らめ」の実践へとくぐり抜けていこうとしている，そう言えないだろうか，としている。

第5章「底流としての日常を生きる」のBさんは，初回インタビュー当時49歳，女性，信州の農家に1949年に生まれた。3人兄弟の長女で，高校卒業後，専門学校に通って資格を取り農業協同組合の生活指導員になり，その仕事を約20年間していたが，職場組織そのものへの疑問と癌で倒れた義父の介護もあって平成3年に辞職。調査時当時は農協の生活指導員をやっていた有志で平成7年に立ち上げた非営利組織「C・G」（仮名）でフリーコーディネーターをしている。廊下つづきの離れに姑さんが住んでおり，社会人になった息子と，結婚した娘がおり，それぞれ独立して生活しており，孫もひとりいる。Bさんは，「挫折の固まりなんですけど，私，いわゆるフリーで生きたいというのは隠居そのものだからかもしれないね」，（ちょうど29歳のときのオイルショックのときに）「『夫婦2人でいる職場の人はひとり辞めてもらいたい』となったの。『いままでの私の職歴も実績もみないで，2人でいるから辞めろって，なんなの？』と，もう（頭）真っ白になっちゃってね」，退職を強いられて，ふたりの子どもの育児でも悩み，その後1年後に隣村K村の農協の生活指導員として復帰。「30のはじめぐらいにK村に行った

ということが，就職したっていうことで考えが変わったね，あの村に出会ってから，村の人たちと出会ってから」，「私，生活指導員で行ったけど，教えてもらったことのほうが多いの」，「すごく地に足の着いた暮らし方をしているんだよね，あぁ，私もこういう暮らしの人たち，こういう暮らし方忘れるところだった，あのまま突き進まなくってよかったなんて思うから，底流にあるんだよね，そういう考えがね」。論者はBさんのこのような挫折や葛藤の経験が地に足をつけた日常の暮らしをしている人たちの姿に触発されて，Bさんの生き方の根っこにある「底流としての日常」が自覚されてきたのであるとする。

3年後の再調査の折にはBさんは，姑さんの介護と看取りを経験し，非営利組織（「C・G」）のフリーコーディネーターの活動に加えて民生委員，農業委員，特別養護老人ホームの有償ボランティアグループなどでも活躍していた。「生かされているいのち」，「挫折をうんといくつか味わって，困難をいくつか克服して，悲しい思いとか，切ない思いを人のやつまで享受して克服して，うんとそうなってきていると，そうなってくるような気がするよね」，「生きてんのが生きがいっていうのかもしれないよ」。論者は，ふたたびBさんの生き方に触れ，あらためて強く感じたことは，『出来合いの知』ではない，底流で培われた『野生の知』というのでしょうか。その深さと強靭さです，と記している。

第6章「いのちを信頼する」のCさんは，「隠居研究会」の主催者の直接の紹介で出会った調査協力者である。2000年1月の初回調査のときCさんは，男性で55歳，脳梗塞で倒れてリハビリ中であった。東北地方の出身で，実家は酪農を営み，東京オリンピックの年に18歳で上京。大学の文学部卒業後，会社に入り雑誌の編集の仕事をやっていたが，社長とぶつかって退社。その後，小さな編集プロダクションを立ち上げたが，Cさんが手形保証人となった債務者が失踪して大きな借金を背負う。当時持っていた仕事を社員に分け，会社をたたみ，その後はひとりで仕事をしながら借金を返す生活。すでに結婚して2人の子どもがいたが，すさまじい借金の取立てで家族に負担をかけたくないと，40代で離婚。もう少しで借金返済が完遂というところで脳梗塞で倒れた。初回インタビュー時の4か月前のことであり，調査時にはアパートにひとり暮らしをしていた。

「『おまえ，体を売れ』とかさ，それがカミさんや子どもたちのところにも行くわけですよね，そのときに，僕は離婚したんですよ」，（倒れて入院して）「それまで体のことなんかまず考えたことがなくて」，「生き残っちゃったですね，生きていっていいのかもしれない，生きていくべきなんだというふうに思いはじめたのは，病院に入って1週間ぐらいたってからですよ」，「人間って死ぬとき，どんなところで野垂れ死にしても，土に帰ればいいじゃねぇかという感じがどこかであったんですね，あまり毎日毎日，自分自身が人の生き方とかなんかいうのに対して，自然のなかに循環していけばいいんじゃないのかと，そのための準備なんて，まったくしてなかったんですね，だから頭のなかが真っ白になったり」，「体が動かなくなったという意味では，否応なしに急激に隠居にさせられたという感じでしょう」，「相対化してみりゃ大したことないんだと」，「社会から外れた眼でみていく，そういう意味では隠居の眼ですね」。論者は，Cさんの脳梗塞によってそれまでのみずからの身体が解体していく経験，また借金を抱えてみずからのいのちをお金に換えようとするギリギリのところで踏みとどまった経験がそのバックグラウンドを生成していっている。その生成の過程がCさんの存在論的基盤になっているとしている。

3年半ぶりの再調査は2003年8月，10月にそれぞれ7時間以上におよんで行われた。Cさんはもう杖は使ってはいなかったが，足どりはゆっくりとして，いまは編集の仕事の経験を活かして，編集のノウハウなどをボランティアで弱視の人たちのグループに「おしゃべり」をしたり，別に原稿を書いたり

しているということであった。「不自由さに慣れてきたっていうか」,「社会というのは，少数者のためになんかできていないって思うんですよ，本当にいい社会っていうか，豊かな社会っていうのは，あのー，少数者のために」,「(植物や) 動物を飛び越えて人間になっちゃってだめなんだ」,（人間の生き方として，信仰として，親鸞の「往相」と「還相」の話をしたり，良寛の話をしたり),「体のほうが多少不自由かなっていう，不自由といえば不自由なのかも。だけどそのぶん逆に，頭のなかはどこにでも飛んで行けるよっていう気がしてきた」,「人生観ってことで言えば，ぐうたらっていうことなんでしょうね」,「宙ぶらりんだけど，孤独と感じたことはないなあ」,「何もしないで生きる人たちを大事にしてたですょね，つまり，そういう社会は豊かな社会なんです」,「『隠居』っていうのは事実ではなくて，社会から外れた人たちの世界観ですよ。それを考えることは，いのちを考えることにつながるんです」。

第７章「生成された地平　―ひとつの解釈として」は，本論の中心的な調査問題であった「人間形成観への問い」に関して中年期のＡさん，Ｂさん，Ｃさんの３人との対話によるインタビュー調査資料を，「仮説演繹法」や「観察帰納法」ではなく「意味解釈法」(今田高俊による分類）による手法で３人に「通底する生成された地平」をひとつの解釈として論じている章である。「再帰的近代としての高齢化社会」という歴史的社会的状況のなかで，人間存在と社会とのかかわりあいをどう考え，新たな人間形成の存在論的基盤をどこに見出していけばよいのか。先行研究としての青井和夫，作田啓一，鶴見和子などの研究等に触発されながら，独自のインタビュー調査を活用して「再帰的社会化」論を考察していく。論者は３人の現代中年によって展開された事例的なライフストーリーから，これまでの近代産業社会における機能合理的な既成的な人間形成観による「社会化」・「再社会化」概念に対比して，３つの生の地平，すなわち (1)「離陸する生」としての「超社会化」, (2)「浮遊する生」としての「非社会化」, (3)「着地をめがける生」としての「再社会化」，という社会化をめぐる「再帰的社会化」プロセスを生成的な感受概念として抽出して分析を試みている。これらの三つの生の地平は，感受的なものであり摸索し苦悶する人間生成観であり，重層的に生成されるものであり，相互に再帰的な関係にあるとしている。

これらの再帰的社会化のプロセスは，事例のなかでみたように，社会との葛藤のなかでクローズアップされてくる「根っこの経験」(生活経験，身体経験，生命経験）とそれらを触発する「道ずれたち」(convoy) の存在，遍歴等を通じて「現像」してくるものである。「離陸する生」としての「超社会化」は，制度化された社会によってつくられた既存の人間形成観に距離を置き，そこから超え出ようとするプロセスである。「浮遊する生」としての「非社会化」とは，一方向的に社会化されるのを拒否してその状態に浮遊することによって静かに内省する，「一歩引いた」位相（反社会的な位相ではなく，非社会的な位相）にとどまることによって人間形成のよりラディカルな地平，生の意味の根源的基層や自然（じねん）を再帰的に照射するプロセスである。「着地をめがける生」としての「再社会化」は，人間存在と社会とのかかわり方の新たなバランス（スタンス）で社会にコミットしていく生が生成されていく，新たな実践の回路を模索してみずからの生のアクチュアリティを獲得していく位相であり，「回生」の位相でもある。

終章の第８章「生成としての人間生成」は，再帰的近代としての高齢化社会における，特に現代中年の限られた３人のライフストーリーの考察を通じてえられた「人間形成観への問い」に対する結論部分にあたるものである。社会化は，さまざまな生活世界の経験から「生きていること」を結節点にして重層的に身体経験や生命経験（生命現象や生態系，自然）へと連なっていく，感得される「経験」への再帰性，「根源的再帰性」,「再帰性の徹底」が見出されていくものであり，それは社会への一方向的に・適

応主義的に・機能合理主義的に社会へ子どもや成員を編入していくプロセスとしてよりも，個々人の生きた経験を通じての生成的な創造的なプロセス，「人間と社会とが〈ラディカルな自然〉に開かれつつ共変的に「回生」していく地平であるとしている。そして，現代中年の「エイジングの発見」を通じて見られる「再帰的社会化」の生成過程として，「ひとつの解釈」という限定をつけつつ「超社会化」，「非社会化」，「再社会化」という重層的なラディカル・エイジングプロセス，再帰的な社会化，再社会化プロセスを確認している。

しかし，「本研究で得られた知見は，決してここで完結するものではないということである。それは，新たな理解と行為の様式の一部でしかなく，新たな了解を完成（生成）していくためのたたき台のひとつを提示したにすぎない」として結んでいる。

III. 評価と問題点

本論文について積極的に評価し得る点と問題点を指摘したい。

本論文の全体的な評価として，「高齢化社会」における人間の生き方の根源的な意味地平を「再帰的社会化」という視点から，先行研究を踏まえつつ独創的に探索しようとして渾身の力を込めて書き上げた意欲的な力作であると考える。画期的な問題構成，理論的な考察，質的な調査方法に重点をおいた調査方法論，根気のいるインタビュー調査の試み，論文構成の諸点ですぐれた論文といえる。

理論的考察と知見については，社会化研究がいまだに充分に多様になされていない状況にあって，単に「エイジングの発見」や「再社会化」に留まらずに，中年期のひとりひとりの個別の人間の生の体験・経験，生活経験，身体経験，生命体験を踏まえつつ「再帰的社会化」という生成的な感受概念の発想を活用して，エイジングや社会化のダイナミックなプロセスに掘り下げて見出され共有される「超社会化」，「非社会化」，「再社会化」という概念を抽出している試みは注目される。エイジングや社会化論，人間形成や人間生成などの個別の事例を通しての独自の発見と業績によりこの分野の新しい可能性を切り拓くものである。

調査方法論や調査方法に関しては，あくまで質的な調査方法を重視して，理論的なサンプリングによる現代中年の３人の事例的なインタビュー調査の実施に徹して，「個人誌的なアプローチ」から初回調査，そして３年後の再調査を根気よく試みている。調査を調査協力者と調査者との相互作用関係として，対話的な手法や調査者の自らの状況や経験をも語るという手法をも含めて半ば実験的な調査過程を展開している。調査者と調査協力者との詳細なインタビューとがうまくかみ合っていてすぐれたものになっている。インタビュー自体が社会化，あるいは人間形成のプロセスであることを積極的に，かつ説得的に提起した研究としても，刺激的でもある。

数多くの文献についての丹念な文献渉猟という点でも注目される。K・ガーゲン，A・ギデンス，U・ベック，H・ブルーマー，K・マンハイム，K・プラマー，青井和夫，作田啓一，森有正，中村雄二郎，鶴見和子，渡辺秀樹などの文献等を参照しつつ，社会学の分野に限らず広く渉猟している。

他方で敢えて問題点を指摘しておきたい。

(a) 理論的な考察の点で，中心的課題である社会化論に関してまず社会化論の先行研究の全体像や問題点の要点をもっと概観しておいたうえで論者のいう「再帰的社会化」論を提起していく方がより説得的ではなかったかとも考えられる。現代中年のラディカル・エイジングにおける「再帰的社会化」のプロセスを「ひとつの解釈」として重層的な「超社会化」「非社会化」「再社会化」の過程を析出したが，他の多様な再社会化の展開や可能性をどのように考えたらよいのか，「自己再帰性」と「制度的再帰性」

との関連が本論で十分に考察されているのか等の諸点でも今後の課題が残されている。

(b) 調査方法論に関しては，対話的手法によるインタビュー調査を中心にそれらの資料についての「意味解釈法」の手法を基礎にしているが，調査法における「信頼性」や「妥当性」，そして「批判的討議」の問題等についても，より以上に言及しておいた方がよかったのではないか，個人誌的なアプローチに重点をおいているところからひとりの人間の生涯にわたる「生の意味地平」や意識をより深く，より広範に感受し抽出していく方法はどのように可能なのか，ライフストーリーをライフヒストリーへどのように展開していくのか，人間の生をめぐるミクロな作業，メゾ・レベルの作業，マクロな作業をどのように連環させていくのか，量的調査との関係や同じテーマを扱っている既存調査資料との関連考察などの諸点も問題点であり今後の大きな課題でもある。これからの研究の一層の発展を期待するものである。

IV. 結論

以上，本論文の内容の審査を通じて，われわれ審査員は，小倉康嗣君に博士（社会学）の学位を授与することが適当である，と判断する。

博　士（社会学）［平成 17 年 2 月 26 日］

乙　第 3902 号　阿久津昌三

アフリカの王権と祭祀の研究—政治人類学の視点—

〔論文審査担当者〕

主　査　　慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員
　　社会学博士　　関根　政美

副　査　　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
　　文学博士　　鈴木　正崇

副　査　　名古屋大学大学院文学研究科教授
　　社会学博士　　和崎　春日

〔学識確認担当者〕

慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員
　　法学博士　　霜野　壽亮

慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員
　　社会学博士　　関根　政美

内容の要旨

本論文は，アフリカ諸社会との「比較」という観点から，王権と祭祀に関する社会人類学的な研究をまとめるという作業を通して，アサンテの民族誌を記述しようとするものである。本論文では，「都市」「ジェンダー」「国家」「政治」「儀礼」「文化表象」という主題のもとに，アサンテの王権と祭祀について政治人類学の視点から多次元的，多領域的な視点から記述したものである。フィールドワークでは，これらの主題をもとに調査・研究をするために，1981 年以来，数年間単位で年次計画を立案して，文部科